

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	昭和六〇年度三田史学会大会；昭和五八年修士論文題目；昭和五九年修士論文題目；昭和六〇年度修士論文要旨；昭和五八年卒業論文題目；昭和六〇年度史学科見学旅行
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.4 (1986. 5) ,p.125(395)- 151(421)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860500-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

2 中國農村定期市の市日配分と階層区分について
——清代の広州府を中心として——

慶應義塾大学（大学院修士課程）関 晃一氏

昭和六〇年度三田史学会大会

昭和六〇年度の本会大会は一〇月二六日（土）三田キャンパスにおいて開催された。内容は左記の通りである。なお、総会において森岡敬一郎教授が新会長に選出された。

研究発表

国史部会

1 「編戸制」の軍事的性格の再検討

慶應義塾大学（大学院修士課程）永利 洋介氏

2 室町幕府禅律方の機能に関する一考察

慶應義塾大学（大学院修士課程）中村奈々子氏

3 改革組合村の運営形態の検討

慶應義塾大学（大学院修士課程）川田 純之氏

4 長州藩尊攘派勢力形成に関する一考察

——長井雅楽航海遠略策をめぐって——

慶應義塾大学（大学院修士課程）関谷 直子氏

東洋史部会

1 カーディー・アン・スマーリンの政治思想における Walaya 論

慶應義塾大学（大学院修士課程）野元 晋氏

西洋史部会

1 ニリザベス時代の外交について

慶應義塾大学（大学院修士課程）後藤 千雅氏

2 ビスマルク時代後期の独露関係

——Lombardeverbot を中心に——

慶應義塾大学（大学院修士課程）馬越 千里氏

3 技術革新と機械工

慶應義塾大学（大学院修士課程）中野 聰氏

4 エドワード六世治世における財政問題

——1552年財政合理化委員会の再検討を中心として——

として——

廣島大学（大学院博士課程）井内 太郎氏

民族学考古学部会

1 江戸時代遺跡出土の陶磁器について

慶應義塾大学（大学院修士課程）森本伊知郎氏

2 近世の土器類に関する数量的分析とその意義

慶應義塾大学（大学院修士課程）小林謙一氏

3 大名屋敷出土の食料遺存体の分析

——魚貝類を中心——

慶應義塾大学（大学院博士課程）桜井準也氏

総合部会

1 南北朝初期における守護権限の一考察

慶應義塾大学（大学院博士課程）漆原徹氏

2 ヒトラー内閣による雇用創出資金の再軍備費用流用

慶應義塾大学（大学院博士課程）原信芳氏

3 トカラ列島における人口動態

——近世の人口減少を中心にして——

慶應義塾大学（大学院博士課程）川崎史人氏

4 荘白一号窖藏出土の癪關係器

埼玉県立川口北高等学校教諭 武者章氏

公開講演会

新羅古墳の特徴

慶應義塾大学名誉教授

江坂輝彌氏

総会

懇親会

(東洋史学)

韓国南岸地方における櫛目文土器成立に関する一考察

——編年を中心として——

西王母に関する一考察

——古代オリエントにおける地母神との比較研究——

咸豊二年廈門排外暴動について

シンガポール華人に与えたるキリスト教会の影響

ムスリム史料におけるノアの箱舟説話

保坂修司

菅原健

史学専攻
(国史学)

日本古代の宮城について

——大極殿・朝堂の機能に関する一考察——

保坂佳男

「土地売買公券」の基本的性格

田島裕久

慰労詔書に関する基礎的考察

中野高行

口頭伝達史序論——文書流通との対比を通して——

西岡芳文

キリストンの婚姻問題

奥村香

(東洋史学)

韓国南岸地方における櫛目文土器成立に関する一考察

——編年を中心として——

廣瀬雄一

西王母に関する一考察

——古代オリエントにおける地母神との比較研究——

咸豊二年廈門排外暴動について

シンガポール華人に与えたるキリスト教会の影響

ムスリム史料におけるノアの箱舟説話

保坂修司

菅原健

昭和五八年度修士論文題目
(昭和五八・五九年度については、編集の都合により未掲載のままになっていたものである)

(昭和史学)

前四世紀のローマのイタリア征服におけるローマとカナレ

—“Civitas sine suffragio” の証題をめぐる—

Edward II 海軍艦に於ける Bastard Feudalism

—Lancaster 伯 Thomas の事例を中心として—

野村 春路

横野 秀昭

(民族学考古学)

マーチング・ルール運動の形成と展開

—特にそのリーダーシップをめぐり— 棚橋 訓

関東・東北における縄文時代後期初頭の土器群 稲村 晃嗣
縄文土器における様式的属性の類似度に関する分析

羽生 淳子

昭和五十九年度修士論文題目

史学専攻

(国 史 学)

天保期の幕府関東農政の展開について

小泉智永子

ゲッブルスと戦争宣伝

佐々木 豊
滝川 澤
角田 望

巡歴説教師としての Norbert von Xanten

近世後期商品作物地帯に於ける若干の考察
—阿波国板野郡竹瀬村の場合—
将軍後見職徳川慶喜に関する若干の考察
—文久二年を中心にして—

細川 義

インドシナ北部の石器時代の研究
—遺跡とその周辺環境—

竹内茂やか
桜井 順也

(東洋史学)

銅鼓の研究

漢代身分表徴としての色彩

—特に綏の場合—

江南農村社会における祭祀組織について

市原 常夫

—祝聖余簿の紹介—

11・11世紀 ムラビート朝期の北アフリカを中心

とする商業・社会状況について 今村 幸夫

イランの農地改革と農村社会

杉浦 茂樹

(西洋史学)

ヴィルヘルム時代の予備役将校団

—社会の軍国主義化との関連を中心に— 寺尾佐樹子

ニューヨーク州政治における革新主義

—ニューヨーク州工場調査委員会の活動を中心に

して—

昭和六〇年度修士論文要旨

史学専攻
(国史学)

室町幕府禪律方の機能に関する一考察

中村奈々子

室町幕府の開創期に、足利直義所管の特殊訴訟機関として設置された禪律方は、保護にせよ統制にせよ、幕府が後の官寺たる禪宗に特別な待遇を与えるための機関と漠然ととらえられてきたが、禪律方設置の目的及びその機能は、まだ十分に把握されていない。

本稿では、禪律方が幕府において担つていた役割と、幕府の宗教政策の中でのいかなる意味を持つていたのかを知るための前段階として、まず禪律方関係文書を補足、整理した上で明らかにできる禪律方の機能に考察を加えた。

建武四年頃からほぼ南北朝期に通じて設置されていた禪律方は、観応擾乱を境に大きく前後期に区分できる。

第一章では、現存史料の多い藤原有範頭人在職期を中心に、寺院経済を支える寺領に直接的なかわりを持つ所務沙汰と、幕府が発する規式の作成など所務沙汰以外の機能をとりあげ、さらに頭人有範の立場を見ることによって、幕府における禪律方の位置付けに若干言及した。この時期については、常に直義と政治的行動を共にしていた有範の存在により、訴訟・規式作

成などにおいて、直義の執政方針を直接的に反映する機関であったと言えよう。その中でも特に、禪律二宗については勿論のこと、禪林内の特定門派に対する優遇も見られないことが注目される。

第二章で扱つた観応以降は、直義を失つて禪律方や宗教政策への関心が低下したのか、一時活動が不明となる。が、その後は、幕府による禪林の整備・統制、そして同時に禪林内部からの組織整備の動きにより、僧録を中心とする五山制が確立していく中で、禪律方は変質、形骸化を余儀なくされていったことがわかる。

改革組合村の内部構造の検討
——武藏国熊谷宿北組合の場合——

川田純之

文政一〇年に關東全域に設置された改革組合村は、荒廃する

関東農村の治安維持と、經濟の再編をも含めた、幕府の関東の一元的把握を企図した政策であった。

従来の改革組合村に関する研究は、概して文政期に集中しており、維新时期まで通して検討を加え、組合村運営の実態や組合村の変質を明らかにしたものは、管見の限り少ない。本稿は、武藏国熊谷宿北組合を取り上げ、改革組合村の内部構造の検討を試みたものである。組合村運営の基盤である組合村入用を中心、囚人番と^{かこい}大惣代や「道案内」の役割等を考察し、当組合の変遷を追うことで、改革組合村設置による幕府の関東農村支配のあり方を考えた。

当組合は、その構成上、二つの特徴があつた。一つは、寄場熊谷宿が中山道の宿場であり、北組合・南組合という二つの組合村共通の寄場として、独立した形をとつていたことであり、もう一つは、北組合村々が、支配上、忍藩領と忍藩領以外の村々に二分されることである。これらの特徴は、囚人番を中心とした組合村入用面や、組合村運営・統轄の面に、大きな影響を与えることになつた。

組合村入用は、組合村の性質やその時々の状況を如実に示しているものであるが、幕府による仕法替えや組合村々の努力にもかかわらず、入用は年々増大し、その内容は多様化していく。その中で、大惣代が入用を一時的に立替えることが、彼らの組合村運営に対する影響力を強める一因となり、大惣代には經濟力のある者が選ばれることになった。大惣代は、その職務の多忙さ、相当額の組合村入用の立替え払いを行なうにもかか

わらず、給金が最低限の必要経費の支給でしかなかつたことを考え合せると、既にある程度の經濟力と、地域における支配力を有している者が、大惣代の地位に、その権力的裏付けを求めていたものと考えられる。

大惣代は、その職務を通じて、「道案内」（大惣代に附属し、実際に警察権力の行使を担当する下役）と密接な関係を結び、治安面で大きな効果を上げた。しかし、「道案内」に「二足の草鞋」的性格の者を雇わざるを得なかつたことから、常に腐敗への危険性を含んでいた。このため、当組合の場合、腐敗による「道案内」自身の交替だけでなく、「道案内」との癒着が一因となり（「如何之風聞」）、大惣代の交替という事態が生じた。この様な点や、組合村入用の減少を図った改革仕法が、かえって入用の増加を招いてしまうという矛盾を生み出す点からも、改革組合村を通しての御取締筋御改革の持つ弥縫的性格とその限界を見ることができよう。

長州藩尊攘派の形成及び抬頭

に関する若干の考察

閑谷直子

本論文は、文久期（一八六一—一六三）の情勢の中で、政治的主体としての長州藩尊攘派がいかにして形成され、どのようにして勢力を強化し、又いかなる政治体制を構築しようとしていたのかについて考察することを主題としている。その際主な視

点を、既存の藩体制とのかかわりに置いている。

長州藩尊攘派は、文久期に至るまでの政治過程の中で既に「手子衆」(実務官僚)として政治的地位を得、藩産物方の政策(集荷機構の独占化・価格操作の主導権の掌握・新しい流通ルートの開拓)を通して、幕府に対して批判とある種の対抗意識を抱かざるを得なかつた。『尊攘派手子衆』が、松下村塾出身者を中心とする藩内の「尊攘志士」達と交流し、その二者が結びついていくことによって形成された。(長井雅楽彈劾行動や兵庫備場出張問題等をみれば、『尊攘派手子衆』はある点で志士達に賛同し、志士達は彼らを通じて政治的地位を得ることができたという事実が確認される。)

以上の考察から、尊攘派は、絶対主義体制への志向を持つ政治的主体であったと考えられる。そして禁門の変(一八六四)による『尊攘派手子衆』の喪失により、以後その志向は強い軍事力の裏うちらもとに進められていくことになる。

(東洋史学)

中国南・西南諸民族の出嫁歌

に関する研究

中原律子

そしてその尊攘派は、世子に依存し、本来ならば政治上の公式な判断を行う権利を持たないはずの世子が、藩主と異なる独自の政治的判断を下し行動を起こすような状況をつくり出し、そうして政治的な力を得た世子を利用して勢力を得、更にそれを強化させていったのである。(この過程は、文久二年四月の世子帰国問題・八月の勅書改ざん問題・三年三月「撫海戦守御備」建白等にみることができる。)

又尊攘派が志向していた政治体制については、藩政機構の改革・產物方ににおける政策・小銃局の設立及び領内通行規制の方針等から、機構の一元化とそれによる権力の一元的な掌握、藩政府によるより直接的な一元的統制を目指したものであったことがわかり、そこからは幕府体制からの逸脱と、絶対主義化の傾向(財政基盤の強化や世子と一部実務官僚)『尊攘派手子衆』

との関係等において)を見いだすことができよう。

本論では、中国南・西南部のいわゆる少数民族と漢族とに流傳する出嫁歌をとりあげ、その婚姻習俗との関連において、その歴史的・文化的性格を明かにすることを試みた。

出嫁歌並びにその習俗の関係記事は宋代からみられるが、資料的には一九五〇年代に中国科学院民族研究所によって、各地域・各民族について総合的に行われた漢語による調査報告がもつともすぐれている。ここではこれら資料を中心として、他の機関乃至個人の行なった採集資料を用い、各族の出嫁歌を

婚姻習俗並びに婚姻制度との関連において分析した。

出嫁歌からは、歴史資料等にあらわれることの少ない一般女性の生活、とくに社会や家庭における女性の地位を窺い知ることができる。ことに水稻耕作を営む中国南・西南諸民族の社会や家庭において、女性は労働力としての価値が高く、女性自身もそれを自覚していることが出嫁歌によく表出されている。しかし、「解放」前は結婚前と結婚後とでは女性の地位に大きな格差があり、それは女性にとって堪えがたい不条理として存在した。出嫁歌はこうした不条理を歌詞に托して表出する手段となつていて。

出嫁歌にはこのような社会的矛盾とともに、生家から新しい夫の家への移行が、「異質の世界」への「負の再生」として象徴的に描き出されている。

出嫁歌は本来、各民族独自の言語によつて歌われてきたものであり、しかも歌詞特有の比喩や隠喩がその中にこめられていて、その意味するところはきわめて難解であり、今後の研究に俟つ点が多いが、婚姻習俗や制度を射照することによつて、その性格と存在意義を明かにすることが可能である。

中国農村定期市に関する若干の考察

——清代の広州府を中心として——

関 晃 一

広東省広州府においては、明代後半以降、一般に「墟市」と

呼ばれる農村定期市が広汎に設立されてきた。

まず、その経済的背景について見てみると、果樹をはじめとする特産品的商品作物栽培の盛行という要因を取出しうる。また、公租銀納化に伴つて、米が商品作物として取引きされるようになってきたことにより、その流通を結節すべく、墟市が広汎に設立されたことにより、それに対応して、糸市・繭市といふ業が顕著な展開を示すと、それに対応して、糸市・繭市といった新たな墟市が設立されてきた。また、都市化の進展に伴つて、食料品卸売市場も新設されてきた。以上みたように、各墟市は各地域の経済的要求に応える形で設立されてきたと言えよう。

次に、墟市の設立主体について見てみると、地域の有力宗族の手によって設立されたものが多かつた。墟市を設立するという投資を行ひ得たのは彼等であり、また、公租銀納化に対応すべく、墟市を必要としていたのも彼等であつた。さらに、有力宗族は、暴利を貪る手段として墟市を利用していった。従つて、墟市からあがる利益をめぐつて、有力宗族間に紛争が発生したり、有力宗族間の潜在的対立関係が、墟市という場に顕在化することもあつた。墟市の新設・廃止の裏では、郷村の政治・社会情況も大きく影響していたと言えよう。

以上の如く、各墟市は、それらが設立されるに際しては、多様な経済的・社会的背景を有していたわけであるが、固有の法則性の下に統合されたシステムの中で、経済的機能を果していだ。各墟市は、取扱商品・舗戸数や河川交通網のあり方等によ

つて、四階層に区分される。その空間配置について見てみると、高位の市場は、その市場圏の外縁部にいくつかの中位の市場を従えており、二階層からなる低位の市場は、それより高位の市場圏に含まれていることが認められる。こうして、各墟市は、階層構造を有するシステムとしての市場網を形成していたのである。このことは、墟期の配分にも反映されている。本稿では、これらの点に関して、順徳県・三水県、さらに石城県及び貴県等を取上げて検証したわけであるが、具体的に物資の流通経路を把握した上で、市場網のあり方を分析していくことが、今後の課題として残されていると言えよう。

清代台灣府における鄉紳・讀書人層の形成過程と教育機關の役割について

中間和洋

本修士論文は、清朝統治下において、移住社会である台湾の地域社会の成熟化が、どのように成されていったのか、という問題意識の下で取り組んだものである。

漢人社会としての台湾社会を見る場合に、先ず、漢人社会を台湾という特殊な雰囲に入れて考察した。移住社会である台湾においては、開拓事業が行なわれ、その中で社会の成熟化が行なわれていった。しかも、社会の成熟化が進まぬうちから、清朝の統治が始まり、それ以来、その行政機構の枠組の中に組み込まれてしまうわけである。このような、台湾という特殊な事

情を持つ中国社会の成熟過程を、一つの事例研究として、台灣府知府・台灣県知縣などの地方行政官、台灣府学教授・台灣県学教諭などの学官、そして各種の教育機關とそこから輩出された讀書人各層の人物志、及び文廟碑などの金石文を検討することによって、地域社会の社会関係の背後にある政治性・経済性・社会性を推し量り、さらに府県儒學の設立過程と、その節目における入学定員規定の変遷過程を押えながら、一府三県で始まった台灣府（台南地方）の地域社会の成熟化と社会関係とを考察した。

本稿の構成としては、I 序、II 台灣府知府と台灣県知縣、III 府県儒學と学官、IV 郷紳・讀書人層と台灣社會、V 結び、の五章から成っており、史料的には、臺灣總督府編『臺灣教育志稿』、『清代臺灣（臺南）人物志』、『清代臺灣教育史料彙編』第一・二・三冊を中心扱った。

本修士論文の結論として導かれてきたものは、地域社会の形成過程というものが、清朝政府という国家の行政によつてのみ推進されるものではなく、むしろ經濟的・社会的な基盤、即ち、地域社会の同族・同郷集団、讀書人各層、商業ギルド集団、学官・地方行政官など、在地の指導者層を中心として推進されていく。そして、地域社会の発展状況、經濟的・社会的状況が、教育機關の設立過程・入学定員数、鄉紳など讀書人各層の輩出数という教育行政面に非常に的確に反映されていることがわかる。このことから、台南地方が最も充実していたのは、嘉慶・道光年間であり、以後、經濟・教育をはじめ各分野において、

北部台湾に中心が移行することが導かれた。移住社会である台湾においても、伝統的な中国社会の形成過程において、地方行政官、学官をはじめとする読書人各層、商工ギルドなど、在地の指導者層の果している役割が重要であるということである。

ハワーリジュ派—シュラーの系譜—

近藤真宣

イスラム最初の分派たるハワーリジュ派は、その一部の者たちの苛烈な意見と行動はよく知られているものの、派としての実態は曖昧である。彼らはその発生当初より、不確定な集団形成原理しか持たず、既に行動の不統一を顕在させていた。その後も彼らの力の結集を妨げ、結果的にその衰亡の主因となる意見の対立と内部分裂を重ねていく。確かに、相互にしのぎを削り除き合う彼らの混沌状態は、きわだつた特徴と言えるが、ハワーリジュ派が一派として存立する基盤については、この対立からはえるところは少ない。そこで本稿では、ハワーリジュ派各派の対立を越えて共通して見られる自意識、あるいは理想像の一つである「シュラー」に着目することとした。

本稿での検討は、ハワーリジュ派の意見形成と分裂のきわだつている第一次内乱から第二次内乱までの時期に限定している。その間に、彼らのシュラー観は、以下のようなタイプとして現われている。すなわち、①楽園入りを期待する通常の殉教

者たちと変わらぬハワーリジュ派の人々がナフラワーンの戦いでみせた原型シュラー、②神罰を恐れ、墮落した現世から離れようとしたクーファ系ハワーリジュ派の人々の前期シュラー、③統治者の不正・圧政と戦い、殉教を願ったアブー・ビラール等が抱いていた移行期シュラー、④闘い自体が目標となつた第2次内乱時の分裂期シュラー。これらの変遷は、意見のような相互排除を招くようなものではなく、シュラー意識のハワーリジュ派的な純化の過程に過ぎず、彼らがその時々に経験した絶望や迫害に応じたものである。その中で、本稿は②と③、すなわち神罰への異常なまでの警戒、および不正の徹底的指弾を示すシュラー観に、ハワーリジュ派を一派として存立させた自意識が現われていることを示唆した。ところで、シュラー観の変容は、ハワーリジュ派自身の性格の変化に対応するものである。とくに、自己の救済を主眼とするシュラー観をもつ①・②のハワーリジュ派が自己充足的であったのに対し、他者糾弾を主眼として、とりわけ圧政との戦いを公言した③・④のハワーリジュ派は、不満を抱く被抑圧者たちを吸収し、反体制運動の核として活動するようになった。他方、シュラーが内容を示唆しない行動様式そのものと化した④にあっては、上記不満者たちの流入と相まって、様々な思惑の並立を招き、ハワーリジュ派としての統合と存立を危うくする内部分裂激化の時期に入つていったのである。

(西洋史学)

ルソーの社会思想についての一考察

——「不平等論」から「契約論」へ——

白戸紀子

事実問題の著「不平等論」と権利問題の著「契約論」は、後

者が前者の終点として問題視されている〈過度の腐敗による自然状態〉を論理的出発点としていること、及び〈純粹自然状態〉を価値概念として、自然人の属性に人間の本質をもとめているという点で関連性があると思われる。この視点から、「契約論」第一編第六章の社会契約の諸前提・問題提起を検討し、「いかに一般意志のメカニズムが作用して」人間の本質へ自律的自由〉が、自然状態とは異なつた政治社会において維持されいくかを問題とした。

ルソーの社会契約は、「各人がすべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず以前と同じように自由である」ことを約束するが、これは、人的相互依存関係と自由という視点から見ると次の様に考えられる。純粹自然状態において、自然人は自給自足の存在で、他者の恣意に拘束されずに自由なる能因」の発露（意志の自由・選択の自由）であり、人的相互依存関係が必然である社会状態では、いかにその本質を保持し得るかという視点で考えられる。

社会契約によって、ある「精神的集合体」が形成され、この集合体は活動が受動的な場合は「国家」、能動的な場合は「主権者」と呼ばれ、構成員は、受動的な場合は「国家の法に服従する」は「臣民」、能動的な場合は「市民」と呼ばれる。だが、国家とは抽象的政治体に過ぎず、実質的には集合的な人民そのものであるし、臣民・市民も同一存在を機能的な相違により視点を変えたものに過ぎない。

さて、国家の全構成員の恒常的意志である「一般意志」は、本質・対象共に一般的である。法は、一般意志の表明であるから、内容・対象の一般性が要求され、その条件として、立法過程への全市民の参加、制定された法への全臣民の服従を要請する。既述の通り、市民と臣民は実質的に同一であり、自己立法・自己遵守という自律的自由が守られているのである。又、個人的な「人間への依存」よりも、現実的な力を一般意志に与えることにより「物への依存」に還元し、人的相互関係が一般意志を媒介とした依存関係へと組織化されることにより、自律的自由が維持される。

一八世紀後半期の

東プロイセン農業社会事情

羽馬孝

表題時期地域の王領地農民の状況を、以下三点から考察した。
土地保有権は、一七七七年の官房政令によって恣意的慣習的

世襲ラスベジツから、法的世襲ラスベジツに変り、一七九〇及び九三年の布告により、義務を果した農民は管区の干渉なしに相続者を決定し得る、さらに安定した世襲ラスベジツ権を得た。しかし賦役との関係上、所有権には至らなかつた。

賦役に関しては、一七五二及び七三年の勅令により、賦役の定量化（プランニシャールヴェルク）が進められたが、王領地小作人は、規定日数外に処理日を設けて賦役を行わせた。そのため、絶対王制は小作人の契約改更毎に定量賦役の導入を規約に盛つた。この成文化と日雇い労働力の利用によって、小作人の不正をなお含みつつも、法的に規制された賦役が定着した。

しかし、賦役の軽減は政策の結果というより、農業の商業化に伴なう賦役の非効率性の顕在化に依る所が大きい。結局、賦役の全廃は、一七九九年の警告文書に見られるように、絶対王制もそれを望まず、完全には実現されなかつた。

世襲隸民制の解消は一七二三年の勅書が先鞭をつけたが、一七六三年の僕婢条例によつて、隸民制に伴なう僕婢義務を利用しない旨、小作人契約に盛られた。一七六七年の僕婢条例では、隸民が意志に反して王領直営地において奉仕する必要なし、と規定された。一七七三年の退行的勅令を経て、一八〇四年には東プロイセン王領地農民の人格的自由が保証される法令が、一応出された。

土地保有権、賦役、隸民制の三要素は密着して絶対王制の社會経済基盤を形成していたため、世紀末には、いづれも緩和されつゝも存続していた。また、農民保護政策は一定の枠内で作

動したため、緩和を捉進した農業の商業的自律運動を封じる面も持つた。結局、王領地ですら農民のそれ以上の自由化は、イエナの敗戦という外圧を待たねばならなかつた。

なお、十月勅令第一二条で「すでに全王領地でそうであるごとく、プロイセン全土で土地隸民制は廃止される」と規定されているが、その三週間後に全王領地における隸民制を、契約に基づく事例を除いて、廃止する布告が出されている事は、先述した農民解放前史を念頭に置く時、プロイセン史の連續性を考える上で興味深く思われる。

Lombardverbot と

ビスマルク時代末期の独露関係

馬 越 千 里

ビスマルク的国際体制の崩壊と露仏同盟の成立に関しては、スマルク以後の政策がその責任を問われてきたが、新たに視点を内政レベルに転じる時、露仏同盟へと帰結する国際関係の転換の基盤は、既にビスマルク時代において形成されていたのではないか、という問題の再検討が要求される。修士論文においては、内政優位論的見地から、ビスマルクの外交政策の根幹を成す対露友好関係が、経済的諸要因の関連によつて次第に崩壊へと向かい、その結果として露仏の接近が導かれていった過程について考察を試みた。その際、中心問題としてビスマルクに

ヨルロシア有価証券を対象とした動産抵当貸付禁止令 Lombardverbot に焦点をあて、この措置を導いた独露両国内部の諸状況、ビスマルクの主觀的意図及びその諸結果の分析に力点を置いた。資本の蓄積の遅れたロシアは、資本導入を国外に大きく依存しており、一八八〇年代後半まではドイツが対露投資の中心国であった。ビスマルクの対露協調外交は、この資本を媒介とした經濟的結合によって、その基盤を安定させていたのであるが、ドイツの積極的な資本輸出は、その結果ひき起こされる様々な不利益の故に、ドイツ国内諸階層の強い反対に直面することになった。こうした状況のもとで、関税闘争以来高まってきたロシアの反獨的傾向に打撃を与える一層有効な手段を必要としていたビスマルクは、ロシアの対獨依存を前提に、一八八七年 Lombardverbot を発令し対露投資を禁止するに至った。もちろんこれは、Lombardverbot の必然性と共に、露仏の金融上の接近の可能性に対するビスマルクの認識、及び政治と經濟の相互関係に関するビスマルクの考慮など、様々な点からビスマルクの動機が考察されなければならない。いずれにしてもこの措置の結果はビスマルクの意図を裏切り、ドイツ金融市场から締め出されたロシア有価証券はフランス市場へと流れ、新たな露仏の經濟的提携が成立すると共に、両国の接近が急速に進展し露仏同盟形成の基礎が準備されたのである。以上のように、ハルでは Lombardverbot が金融政策上の一措置にとどまらず、政治・外交政策にも重大な影響を及ぼし、独露友好關係の基盤の崩壊、ひいては露仏の提携を促進する結果を招く。

技術革新と機械工

——一九世紀末のイギリス機械産業——

中野 聰

一九世紀後半は、イギリス機械産業における技術革新の時期であったが、労働の側面からその社会的影響を考察することが本稿の目的である。分析は、主として以下の、相互に連関した個別的テーマに関して行なわれる。

一、技術革新の性質と熟練の置換。対象を機械、および仕上げ・組立て工場に限定し、主要な技術革新、特にタレット旋盤、フライス盤、研削盤が熟練工に与えた影響を社会的コンテクストを除外した形で考察する。一定の熟練の置換がみられるが、その影響の限定性を指摘しうる。

二、技術革新が機械産業の階層構造に与えた影響。技術革新を中心とする変化の長期的影響の分析で、センサス資料を中心に、いわゆる半熟練工層の増加と彼らの經濟的地位の相対的方向を示す。

三、一八九七—一八九年の機械産業における全国争議の分析。基本的テーマは、従来の技術革新とストライキの連関に関する

いたことを分析した。この措置の結果もたらされた露仏の經濟的結合が、現実に露仏同盟締結を導いた外交政策上の展開にどのように合流していくのかという点は、今後なお実証的な解明が要求される問題である。

指摘の不明確さを改め、実証的に把え直すことがある。他方でこの分析においては、社会運動展開プロセスを全体的に把握すべく、労働戦闘性・社会心理形成のための環境的諸条件の理解等を包括するため、次のようなテーマを取り扱つた。

景気変動とストライキ発生に関する数量分析。（正の相関が得られる）。工作機械の取り扱いをめぐるストライキの割合の増加。技術革新と争議の連関の指摘。クラフト・ユニオンおよびクラフト・コントロールの機能。さらに、熟練工の日常意識とクラフト・コントロールの関連。クラフト・ユニオンの戦闘化。（総書記選挙の結果の推移）。

各個別テーマに関する以上のような結論の他に、熟練技能との関連において、いわゆる労働貴族論に言及した。一九世紀第3四半期のイギリス社会の保守化を支えたといわれる労働貴族は熟練工層の後退は、熟練の部分的解体＝半熟練工層の増加による地位剥奪とともに、労働生産性の高い諸産業の形成による相対的地位低下の結果として理解される。そして、この局面において彼等は社会革新の一翼を担うに至るのである。

（民族学考古学）

江戸時代遺跡出土の陶磁器について

——麻布台一丁目遺跡の事例を中心として——

その結果、まず各遺構から出土する陶磁器は、攪乱を受けていなければある程度の年代幅に収る傾向があり、これを基に遺構の主たる年代を想定することが可能であると考えられた。またその中で個体資料の年代は更に幅の狭いものとなるが、破片のみの資料の示す年代幅は、広いものとなる傾向が認められた。破片資料の中には客土や攪乱により混入したものも含まれる為、年代幅が広くなるものと考えられる。

出土した陶磁器は、肥前・瀬戸美濃という当時の二大窯業生産地の製品を中心として、その他に京都・備前等の製品が認められるが、いずれも当時の各産地で量産されていた日常雑器が主体をしめている。土壤別に陶磁器の産地についてみると、一七世紀から一八世紀前半頃の時期までの遺物を主に含む土壤では、肥前産の製品が五〇%以上の割合をしめる土壤が多い。し

近年はいくつかの近世遺跡が調査され、多種多様な遺構や遺物が検出されている。こうした資料は、当時の物質文化・日常生活・物資の流通などを考える際に、具体的な資料となると思われる。遺物の中で陶磁器は、近年の生産地での編年研究の進展から、年代や産地の同定がある程度可能な数少ない遺物のひとつとなっている。本論文では上杉家・稻葉家などの中屋敷・下屋敷跡である港区麻布台一丁目遺跡での事例を中心として、遺跡から出土した陶磁器の器種・産地・年代などの属性をとりあげ、遺構出土の一括遺物を基本的な単位として、主に量的な点から遺物の遺存状態・器種組成・産地の問題などについて若干の考察を行なった。

かし一八世紀後半から一九世紀の時期の遺物を含む土壌では、瀬戸美濃産、また現在同定しえない産地の製品のしめる割合が高いものとなつてゐるという違いが認められる。江戸といふ消費遺跡におけるこうした主体をしめる産地の変化、瀬戸美濃製品の増加といふ現象は、当時の生産地での生産状況の何らかの変化を反映したものである可能性が考えられる。今後は他の遺跡との比較、また文献的な研究とも対応させ、こうした流通状況をさらに検討する必要があると思われる。また武家地の中に町人は存在していたが、町人地の遺跡とも比較を行い、武士や町人といった階層的な差が遺跡や遺物の上ではどのように反映されているのか、等の問題についても検討する必要があると思われる。

昭和五八年度卒業論文題目

国史学専攻

- 斑鳩諸寺の建立について
- 天平画工人の動向
- 白村江の戦と日本の出兵
- 春日社の創立をめぐつて
- 神の救済——神官寺の創建をめぐつて——
- 飛鳥仏教の諸問題
- 大化前代大伴氏について
- 国司制度の衰退
- 大兄の基礎的考察

- 宇山葉子
- 滝口達也
- 上野桂子
- 土田純子
- 神戸とみよ
- 薄葉健二
- 高野満夫
- 水書英晴
- 手滋子

- | | |
|---------------------------------------|-------|
| 藤原仲麻呂政権下における吉備朝臣真備 | 青山康子 |
| 藤原不比等について | 仁科哲郎 |
| 菅原道真左遷時の中央官人の動向について——道真配流事件を中心に—— | 前田早百合 |
| 天文期の京都と町衆——法華一揆と細川晴元政權—— | 国井淳子 |
| 武家社会に於ける女性の地位——鎮西地方を中心とした一考察 | 佐々木操 |
| 中世手工業者の身分 | 山川純子 |
| 比企氏の乱と北条執権政治の成立 | 久我竜二 |
| 織田信長と朝廷——信長の將軍権力形成の過程を中心にして | 小杉直久 |
| 修道会の立場よりみた徳川幕府禁教令発令原因の考察 | 中村奈々子 |
| 近世京都の町組における町代に関する一考察 | 矢萩倫子 |
| 安政の新二朱銀について | 横山めぐみ |
| 化政期における江戸歌舞伎の観客階層 | 浪江毅 |
| 享保改革後期に関する一考察——地方御用掛としての大岡忠相を中心として—— | 鈴木由起子 |
| 阿部福山藩銀札考 | 野沢秀樹 |
| 法華宗不受不施派に関する一考察——その法難に於ける幕府の動向を注目して—— | 只松伸一 |
| 佐久間象山の海防思想 | 環藤秀樹 |

譜代大名の江戸城中に於ける詰所に関する一考察——

帝鑑問詰・雁問詰を中心ニ——

山田 多知見

東晋知識人の受容した仏教（格義仏教）の性格と役割

岡野 正純

十七～十九世紀における東アジア地域の国際秩序——

国書を中心として——

広沢 有久

幕末期における幕府とフランスの連合過程に関する一

考察——横須賀製鉄所建設問題を中心に——木村 吉孝

田代 浩也

廣東貿易における関税の財政に果たした役割 古館 正清

山田 真史

高杉晋作の討幕活動

高群逸枝の女性史研究 その成果と課題——女性史研究の出発点として——

土橋 緑

蘇州「織傭の変」に於ける抗税闘争の性格について 中島 忍

改革組合村について——熊谷宿北組合を中心ニ——

川田 純之

上海共同租界における市参事会の変遷——中国人の行政参加をめぐつて—— 長岡 浩一郎

新潟県南魚沼郡湯沢町浅貝村誌——三国街道とともに——

野中 昭弘

黄遵憲の変法論における議会制問題について 長岡 浩一郎

一九世紀末における朝鮮の国内改革

井上 秀貴

清代台湾における読書人層と地域社会 中間和洋

条約改正史——条約改正論の展開——

井上 哲人

清代台南府に於ける庙の社会的機能 田中 順

浅草オペラの時代——日本洋楽外史——

塚田 晃一

フィリピン・フォーク・カトリックムの成立と意義 田中 順

元田永孚の国家論

会田伸生

イランにおけるニザール・イスマーイール派——その前史から千年王国主義の破綻まで—— 野元 晋

大逆事件と後期幸徳秋水の思想

沼田秀樹

第一回十字軍当時のイスラム社会 倉八環

東洋史学専攻

民爵賜与に伴う“女子百戸牛酒、酺五日”について 松本暢子

——中国古代における社—— 中野昌明

高句麗長寿王代平壤遷都の要因及びその史的位置に関する考察 宮脇晶

して

廣田 茂樹

委任統治時代のパレスチナ 小林 和香子

日本の中東外交

高 橋 誠

一〇七四年までのグレゴリスウ改革と叙任権闘争の原

因について

小 嶋 辰 夫

西洋史学専攻

アルフレッド・ミルナー——イギリス社会帝国主義の一典型

鈴木祐三

ウェーリラム・オッカム——一四世紀の思想について

上田清隆

イギリス労働組合会議の成立

中野聰

一九世紀中葉のイギリスにおける保守的傾向

宮川美波

ヴィクトリア時代の衛生改革

井本真希

移民とコミュニティー——イタリア系アメリカ人の歴

瀬 窪 千秋

史——
ウッドロー・威尔ソンの外交政策

細見直子

ワーグナーからヒトラーへ
独ソ戦におけるドイツの補給・兵站問題

鈴木裕

第一次世界大戦における新外交とブレスト・リトヴィ

クの講和

太平洋戦争下における日系アメリカ人強制立ちのき

年輪年代学について

藤崎博明

ナイジエリア・ナショナリズムの特徴とその発展

渡部靖之

段階的考察

小原一典

いわゆる「特殊磨石」の研究

小岩井雅子

ユグノー戦争

小田嶋永

勝坂式土器の文様構成について

森本伊知郎

平野郁久子

ヴェネツィア共和国繁栄期における現実主義政策について

猪原直子

フランス革命における基本的性格の考察

東雄二

アメリカ革命期におけるアメリカ・インディアンの人種差別の歴史について

金久保朝世

フランス革命におけるサン・シニョロットの実態——彼らの行動と社会的立場

小林弘英

ルイ・フィリップの親政
ジョセフ・チエンバレンの帝国政策——帝国の膨脹と統合

広瀬真弓

スカラベ——アミュレットとしての用途を中心として

一瀬明子

民族学考古学専攻

小岩井雅子

繩文中期農耕論の再検討

蜂谷信夫

スカラベ——アミュレットとしての用途を中心として

一瀬明子

アナトリア新石器遺跡——チャタルヒュイック社会の姿

小田嶋永

いわゆる「特殊磨石」の研究

森本伊知郎

勝坂式土器の文様構成について

平野郁久子

南関東に於ける立川ローム層下層出土の石器群の変遷
に關する試論

田 島 新

文学作品によるアイヌ研究

渋 谷 和 邦

アイスランド民話の構成

綱 島 広 美

金刀比羅宮における祝賀行事について

溝 淵 純 子

通信教育課程

律令体制の形成——壬申の乱前後——

岡 保 子

法然——その思想的特徴について——

松 本 京 子

世阿弥の生涯とその作品

松 本 恵 子

古代・中世初期の交通における馬

妹 尾 宮 子

鎌倉時代における女性の相続権

加藤 岗 知恵子

伊勢神宮領の解体過程についての一考察——室町期の

飯 田 敏 雄

伊勢国を中心として——

高 杉 晋 作

幕末長州藩における倒幕論形成過程に関する一考察——

戸 塚 康 二

前期水戸学の歴史意識——『大日本史』編纂過程にみ

高 崎 辰 雄

江戸時代における光圀の歴史構想について——

吉 田 陸 奥 三

伊豆における漁業の発達を中心にして——

豊 泉 正 子

西郷隆盛と征韓論について

中 西 萌 子

渡辺華山と蚕社の獄

内 村 鑑 三

における主戦論から非戦論への変説に関する一考察

品 田 与 志 夫

人柱伝説に関する一考察
文明史論の歴史的研究

志茂田 典 子
山 田 千鶴子

近代初頭におけるスコットランド王権の特徴——宗教問題を中心として——

佐 藤 和 子

カナダ移民史——三尾出身者を中心として——

佐々木 敏光

イサベル女王の統治の理想と現実

鈴 木 陽 子

アウグステ・イヌスの「三位一体論」

鈴 木 直 高

ルイ・ XIV世とその宫廷生活

鈴 木 美 浦

伊場遺跡出土弥生式土器の特色

中 村 明 美

墓制からみた日本と東アジアの文化交流

酒 井 フサ 子

ささら舞の研究——秋田県仙北地方の二事例を中心にして——

鈴 木 和 子

昭和五九年度卒業論文題目

国史学専攻

戒師招請に関する一考察

福 田 正 德

天武一四年三月壬申条の検討——地方行政と関連して——

廣 野 村 千 鶴 震 也

光明子——その政治史的役割——

渡 辺 逸 美

天武朝の仏教について

石 井 和 子

皇太子摂政制の変遷

村 橋 本 由 紀 子

半跏思惟像の系譜

村 松 琢 紀 子

定額寺制度に関する考察

- | | |
|--|--|
| 俘囚と夷俘についての若干の考察
宇多天皇即位に関する諸問題
雜徭について | 阿部雅人
吉原恵理子
林田正彦
合—— |
| 八世紀における浮逃政策史
天武朝の外位 | 新村治義
上野純也
池田久志 |
| 奈良時代の外交史上における渤海の位置づけに関する再検討
養老元年詔の史的意義——藤原不比等と行基の関係から | 長谷川美保
松下由美子
小谷邦子 |
| 「編戸制」の軍事的性格の再検討
法然と専修念佛教団の性格について | 永利洋介
大森隆史
田口聰 |
| 平氏における伊賀国鞆田庄支配について
院政論——前期院政政権を中心として——
信長政権成立過程における本願寺勢力の位置付け——
戦国大名との関連において—— | 長谷川美保
松村裕子
安藤昌益新論——宗教家としての昌益像の試み——
天保の改革における幕府の対外政策——軍制改革を中心とする考察 |
| 鎌倉幕府訴訟復元への試み——裁許状の現存しない訴訟について——
武田信玄の治水政策——「信玄堤」について—— | 宮崎宏
久世・安藤政権の性格
野村望東尼の活動と思想について
渡辺共成 |
| 鎌倉時代初期に於ける公武関係について——大姫の入内問題を中心として——
白河院政の歴史的意義について
將門の乱について——特に武器・武具の形態変化と
戦闘様式の変化—— | 小倉由布子
伊藤路子
池田登志子
今宮有子 |
| 金沢貞頼書状にみる食物贈答記事について
文書を通じてみる武家所領相続の実態——新田氏の場 | 稻垣いつ子
三原真貴 |
| 『大総合世界百科事典』(ドイツ)の「日本」の項に関する考察
開発構想を中心とした田沼意次の政治について | 森廣見
羽毛田豊 |
| 元禄時代の心中流行における社会的原因について
安藤昌益新論——宗教家としての昌益像の試み——
天保の改革における幕府の対外政策——軍制改革を中心とする考察 | 平田豊
大出由起子
小柴裕司
清宮政宏 |
| 町奉行所を中心とする江戸の治安維持体制
占領政策の転換について
軍部大臣現役武官制度復活の意義
台湾阿片問題の研究
戦前の教育の二面性について
近衛新体制と社会大衆党 | 藤原寛治
中村寛治
犬塚直子
安藤順子 |

国家神道形成期における神道国教化政策の行方——二

つの転換期にポイントをおいて——

小崎裕之

日本労農党の研究——無産運動の無力化・右旋回の考

察——

『朝野新聞』における朝鮮問題の論調

長谷川治彦

日本におけるワシントン体制の展開

松岡伸彦

新憲法制定による天皇の地位の変化

羽鳥桂子

青木繁と明治浪漫主義

ネバールにおける「近代」の存在——リマール（一九一八？—一九七三）の作品を通した小考 星 寛
一〇世紀のイスラム文化形成に関する一考察 マス
ーディーの活動を通して——
マムルーク朝末期カイロにおけるスューティーの生涯
——学生時代を中心に—— 長谷部史彦
グラッド・シェペシュ考 泉 光一郎
一六世紀後半アナトリア東部の農村社会と土地問題

東洋史学専攻

西漢時代の馬政と馬政官制についての一考察 藤田和郎

重政恵子

一七世紀日本磁器の輸出に関する一考察
清代後期に於ける寡婦救済機関に関する一考察

笹井優子

何東（一八六二—一九五六）にみる買弁の社会事業と

その意義

奥村京子

清末における海運論と船商の採用について

鈴木貴志

太平天国の女性についての一考察

狩野陽子

清末毀学風潮を通しての農民の暴動について

太田俊樹

日清戦争前に於ける東アジア情勢と琉球帰属問題

宮入英雄

一進会の活動分析——国内を中心——

金順

『東西洋考』の書誌学的研究——瓜咲伝を中心にして——

奈良修一

西洋史学専攻

エジプトのムスリム同胞団における「イスラム原理主義」思想とその展望 山田晶子

小田切裕
鶴田純一郎
田川卓司
山田晶子
三宅一成

米国の対中東政策

めぐる、ウヨーバーの方法論に関する一考察

鈴木武蔵

の没収政策を中心として――

山下潤

ショペングラー以前における有機体文化論の発展

石崎達朗

ドレーフュス事件におけるジャーナリズム

山下真紀子

イタリア・ファシズムの発生過程における民主議会政治の崩壊

池田真紀子

ルソーに於ける人間論の研究

渡辺信吾

ネビル・チエンバレンの宥和政策における再軍備問題

太田直樹

アメリカにおける金融資本の成立

紫藤潤一

イタリア・ファシズムの発生過程における民主議会政

山下真紀子

MAGNA CARTA の歴史的意義

向井安蔵

一二世紀ルネサンスとシャルトル学派の自然学

大橋眞弓

現代世界における工業生産力と国家の政治力との相関関係について

石井聰

一五世紀フィレンツェの兄弟会を考察する初めの一歩

太田直樹

南アフリカにおけるイギリスの帝国主義政策、一八九〇—一八九九

秋葉知子

中世ドイツに於けるユダヤ人社会――ヨーロッパの他の地域との比較をふまえて――

貝塚敦子

THE ATOMIC BOMB AND ITS INFLUENCE OVER AMERICAN FOREIGN POLICY

田中千重子

ルターによる宗教改革と領邦教会制

山田利律子

E・グレイの外交政策と第一次大戦の原因について

大泉正弘

オーストリア継承戦争と外交革命について

宮崎知子

バルセロナ事件――カタロニアにおける反フランコ勢

石幡克郎

サン・ジエスト――その人物と思想について――

浦川千佳子

力の確執

大泉正弘

アメリカ革命の理念の形成について

杉町かおり

第一次大戦前における中央ヨーロッパ構想の復活

神谷康江

フロンティアとアメリカ人の国民性

末森敦

異端審問と中世社会

三輪誠

ドイツの戦後処理問題における冷戦の起源
ハンガリーにおける反ファシズム民族解放運動

宮堂幾太

聖婚儀礼――古代シユメール文明を中心――

阿部真生子

第三帝国初期におけるユダヤ人政策――ユダヤ人財産

閔隆司

古代ローマの家族制度の変化とその原因

古川郁子

パウロ教説論――ガラテヤ人への手紙をめぐって――

笹村元康

村上優子

幕末期における下総佐倉藩城下の農村構造の変化について

瀬樂崇

足利尊氏

縄文文化中期の出産土偶について——山梨県釧路堂遺

林田安道

跡出土例を中心として——

朴眞和

東北地方に於ける縄文時代後期後葉の土器群——所謂

高橋宏道

瘤付土器——

高柳圭一

上黒岩岩陰遺跡出土の石器に関する一考察

古田幹一

村井弦斎論

藤沢晶子

先土器時代遺跡における立地条件の相違について——

五十嵐彰

特に野川流域遺跡群を例として——

山口弘継

新聞の考古学報道に関する内容分析

五十嵐彰

鎌倉時代に於ける石器に関する一考察

古田幹一

新潟と石斧に関する考察——特に鎌を中心として——

若林勝司

石器の用途推定について

大浦真紀子

縄文時代における人口動態に関する一考察

奈良貴史

アイヌ民族の他界觀念に関する一考察

紺野智

嫁田伝説の民族学的研究

三木聰

日本の昔話における笑話の分類

横山恵美子

通信教育課程

加藤朱実

東大寺法華堂とその仏像群

全順子

千利休の茶湯における芸術性

渡山恵子

東北地方における木地師と伝統こけしについて

昭和六〇年度卒業論文題目

国史学専攻

近江令と飛鳥淨御原令

大宝令の成立過程——造籍と班田——

宗元寺の建立——軒瓦文様を中心として——

奈良時代における在地勢力と仏教受容

称徳・道鏡政権に関する一考察

奈良朝後期の藤原氏式家

平安初期護国仏教の展開——内道場をめぐって——

元日朝賀とその変遷

平がなの成立過程

中世建築における宋様式の受容について

酒井家と抱——残存史料の検証を通じて——

駅戸数
出雲神話伝承の撰録
薩摩国の財政状態に関する一考察——隼人支配を考える基礎として——

「知太政官事」制草創期に関する一考察
藤原式家の廟堂進出——種継の登用理由の一考察——

行基の社会事業と律令国家の変質——榮原永遠男氏説

佐谷戸 詔子

角田史子
川本尚子
阿部修
今尾千絵
山下茂人
藤本佳子
佐伯泰之
指谷久美子
木村さやか
渡辺保弘
中島利充
明日香津五
天内克史
森泉雄之
日和佐宣正
森晋一郎
坂口靖彦
飯窪里由子
大音百合子
石橋かおる
加藤千雪
戻茶から茶の湯へ
義晴・義輝発給の御内書に関する一考察
後北条氏における家臣団編成と領国經營
戦国における村上水軍について
信長政権下における身分的支配に関する一考察
城割りの再検討序説
近世後期対馬藩日朝貿易の展開
一六・一七世紀スペインの対台灣政策の動機と挫折
ルイス・フロイス『日本史』から見た信長の宗教政策
「絵手本」としての北斎作〈漫画〉及び諸画譜群
の一考察

の検討を中心に——

白木良則

園井亜都子

壬申の乱の勢力基盤『湯沐』について
八世紀の天皇と太政官の基本的関係について
平安末期に於ける相模国武士団の存在形態に関する一

封建制度成立期における主従関係
向について
大野莊志賀村南方における下地中分と地頭志賀氏の動

考察

浦元誠司

中世の女性——密懐法と財産について——
室町幕府開創期における禪宗対策

余湖明彦

田子島尚子

原淳子

坂口靖彦

加藤千雪

戻茶から茶の湯へ

義晴・義輝発給の御内書に関する一考察

後北条氏における家臣団編成と領国經營

戦国における村上水軍について

信長政権下における身分的支配に関する一考察

森泉雄之

日和佐宣正

森晋一郎

坂口靖彦

城割りの再検討序説

近世後期対馬藩日朝貿易の展開

一六・一七世紀スペインの対台灣政策の動機と挫折

稻田高一

「知太政官事」制草創期に関する一考察

藤原式家の廟堂進出——種継の登用理由の一考察——

宮本惠里子

内藤正人

陸政策の一斑

出水智恵子

化政文化——江戸の庶民と芝居——

字佐美奈々

明治初期における日本の対中国外交の特質——日清修好条規の成立過程に注目して——

浜田宗芳

高野長英——西洋科学の先駆者として——

古藤祐子

日本資本主義発達史における明治維新の意義

藤代博子

幕末志士の遊歴——吉田松陰を中心として——

嵯峨山雅昭

文久三年の政治情勢について——將軍後見職徳川慶喜を中心にして——

前島吉彦

東洋史学専攻

高杉晋作の割拠論について

河野綾子

古代東アジアに於ける射天説話と射日説話

阿部哲

草莽中岡慎太郎

木村元一

一九〇五年上海共同租界会審衙門事件について

甲斐文美

坂本龍馬の大政奉還論の意義

丸谷潔

チベットをめぐる中国とイギリスの関係——一〇世紀初頭のダライラマ一三世亡命事件の意義——

部落委員会活動——その成立と実践をめぐって——

勇彬

一九二七年の「四・一二」クーデターにおける青幫の反共活動

柏木和彦

甲申政変の評価をめぐっての研究の推移と評価観点について

任石川

東京における五四運動——一九一九年五月七日の中国人留学生東京元威遊行運動について——

河合冬樹

海軍の東条内閣打倒運動——岡田・高木・調査課ブレーンの思想と行動——

菜美

一九六〇年代の中国の調整政策に関する一考察

北畠敏幸

関東河川水運の展開とその意義——布施河岸からみた近世中期の利根川水運——

伊豆誠二

中國古代におけるレガリア＝斧鉄

下沢周

鉱夫保護に関する政府及び各企業の就業規則の変遷と実態

大谷誠

太祖王代における高句麗の興起

鈴木佳光

演劇史にみられる戦後社会の想像力と変容

川本孝子

チンダマニの定義に関する一考察——改訂版の系譜から

高原真之

身体的障害に対する差別意識の発生と展開——紙芝居『原爆娘』を素材として——

友部愛

王權即位儀礼と北方系要素

西村告子

日露戦争の史的位置——一九〇〇年代前半に於ける大

儒教の宗教的性格——とくに孔子の宗教觀について——

一二・九運動に関する一考察——共産黨の指導について	平河由美子	古代イスラエルの特殊性——前一二〇世紀における周辺國家との関係——	西井美穂
古代朝鮮半島南部における境域について	松井一夫	ヘロドトスの「スキタイ」について——ギリシア人の見た遊牧民——	斎藤裕二
儂智高の反乱の発生原因	松村公明	アポロン神とその神託についての考察	寺田隆介
イランとグリボエードフ	宮村暁子	古代エジプトの女性——神話を背景としたその生き方——	山下真美
パレスチナ解放組織について	大川登	ローマ元首政の成立——インペリウムを中心として——	小林聖二
ムハンマド・アブドゥの調和論	小林健一郎	ニコラウス一世と教皇権發展に関する一考察	佐々木勉
サラディンとジハード	小林聖二	フシーテン運動の宗教的特色に関する一考察	島田義昭
一九世紀後半のサレの植民地化とその変容	佐々木整	カタリ派の起源をめぐる一考察	高畠政彦
オスマン朝のニザム・ジェディード	佐々木勉	イギリス帝国主義に於ける南アフリカのもつ意義	平林彰
イラン革命とクルド族の動向	佐々木勉	アメリカ帝国主義史の初期段階——米西戦争——	渡辺修
米ソ中東戦略とエジプト・イスラエル	佐々木勉	アルメニア・グルジア戦争——ザカフカースに於ける民族問題——	一木久晃
ブハラ汗国の国家制度	佐々木勉	歴史に於ける個人の意味	松谷なつ子
オスマン朝治下アナトリアのキャラバンサライ——シラーフダル・ムスタファ・パシャ・ハンについて	佐々木勉	「教訓としての歴史」再考	古賀敦子
西洋史学専攻	佐々木勉	古代歴史思想的一面	滝沢正夫
ローマ・カルタゴ戦争に関する一考察	岩崎裕信	マグナ・カルタの性格	本田喜美男
インカ帝国の起源——弱小部族からの飛躍	東伊里弥		本田中誠
古代オリンピック——エケケイリアとその周辺——	藤本淳		向井洪

プリモ・デ・リベラの軍事独裁

柳沢 剛

一八世紀フランス絶対王制下における銀行とその政策

本多 真紀子

マダム・ロランとフランス革命

黒川 真理

トマス・モア

田中 正隆

一八世紀後半のフランス国家財政の破綻とそのフラン

平戸 久美子

ス革命への影響について

戸田 直子

ナポレオンの大陸封鎖令について

市川 敦子

ルイ一四世時代の舞台裏

木村 直美

十九世紀末オーストリアにおける民族闘争とドイツ人のジレンマ

小野池 茂

国際連合——戦争と平和に関する問題の処理——につ

斎藤 恵美

プロイセン憲法紛争とビスマルク

佐藤 麻紀子

エカテリーナ十二世——その理念と行動について——

本田 雅子

ワイメール議会制民主主義の崩壊過程についての一考

猪脇 和夫

第一次大戦末期におけるW・威尔ソンの外交政策

長田 健

第二次大戦末期の植民地問題をめぐる英米の外交的対立——インドシナ問題を中心として——

小林 泉

第二次帝政期の工業界内部の対立についての一考察

永尾 健一郎

スペイン内戦におけるアナルコ・サンディカリズム革命運動の挫折についての一考察

関沢 晓夫

バウハウス運動の成立過程についての一考察

福島 輝也

キュー・バ危機をめぐる国際政治の動向

大多正人

真珠湾の真実とは？——太平洋戦争勃発原因をめぐ

戸田 直子

ヒットラーとラジオ戦略——政治と宣伝技術との関連について——

渡辺 恵美子

アメリカの禁酒法運動と革新主義

花尻 淑子

第二次マクドナルド内閣の崩壊と一九三一年の危機について

浅賀 ふみ子

「平和に対する罪」の成立過程についての一考察——

今村 信子

第二次大戦末期の連合国の大日本政策との関連について——

山口 徹

ショトレーゼマン外交とヨーロッパ統合運動

内田 雅美

シドニー・ゼマン外交とヨーロッパ統合運動

今村 信子

民族学考古学専攻

ヌジの「養子縁組」

環境収容量算出に関する一考察

牧野 久美

サケ・マス捕獲の伝統的漁具・漁法について——特にアイヌと近世本州との比較を中心にして——

田中 一雄

農耕社会における文化変化に関する一考察——特に人口モデルを中心にして——

山口 徹

日本におけるネペール民族学の研究史

茂木 寿

埴輪樹立形式の変遷——群馬県の古墳を中心にして——
 ヒマラヤ山地民の相互依存関係——Thulung Rai
 族の日常生活を通して——
 地蔵に関する伝説の民俗学的考察
 明治時代後半の食生活に関する一考察——村井弦斎の著作にみる市民の食生活——
 弥生木棺墓の一考察——特にその形態差をめぐって——

船木秀水
 尾原徹
 武田弥生
 藤沢晶子
 菅沼圭介
 両角まり
 須藤公恵
 田山優一
 伊藤君江
 守谷広子
 加藤殷子
 杉本恵利子
 長谷川恵子

近世の土師質皿形土器について
 繩文時代の炉——東北地方を中心として——
 通信教育課程
 佗び茶——成立とその背景——
 古代東北蝦夷の同化
 律令的人民支配をめぐる試論——大宝二年戸籍における年齢区分呼称を手がかりとして——
 中世松平郷徳阿弥入郷時期についての一考察——莊園体制における国人の勃興——
 建武政権下における北畠頼家の動き
 吾妻鏡にみる北条政子
 鎌倉時代における女性の相続権
 中世武蔵武士団の党的結合について——特に秩父氏についての一考察——

信長と大蛇——信長権力形成の側面——
 西郷隆盛と福沢諭吉
 古代中国の治病觀に関する一考察
 医藥文化からみた日本におけるアズキの俗信
 ワイマール共和国崩壊原因に関する一考察——ワイメール憲法に於ける統治機構上の問題点を中心として——

白土淑子
 飴本文子
 野瀬弘美
 ワイマール
 三日で行われた。美学美術史学専攻の西川新次教授、国史学専

島山聰
 岩崎多香子
 笠井百合子
 池上千鶴子
 山本久美子

昭和六〇年度史学科見学旅行

攻の河北展生教授・志水正司教授・坂井達朗助教授・柳田利夫
助教授の五名が引率し、学生約四〇名が参加した。見学地は山
梨県甲府方面で、次の通りである。

(一〇日) 大善寺・清白寺・放光寺(甲府泊)

(一一日) 国分寺・尼寺跡・称願寺・福光園寺・姥塚古墳・善

光寺(甲府泊)

(一二日) 願成寺・山梨県立美術館・東光寺・葡萄酒製造所

執筆者紹介

高瀬弘一郎 慶應義塾大学文学部教授

中村孚美 同

桐本東太 慶應義塾大学大学院文学研究科

博士課程在学

横野秀昭 信州学園教諭

拓殖大学政経学部講師

松崎欣一 慶應義塾志木高等学校教諭

慶應義塾大学文学部講師

中野高行 慶應義塾大学大学院文学研究科

博士課程在学